

2021年10月27日

「イタリアと日本の美意識の差はあるのか」

薬師寺長 松久保 秀胤氏  
Mr. Shuin Matsukubo

彫刻家、チェッコ・ボナノッテ氏の作品にすっかりと私は惚れ込みました。

薬師寺の住職は終身住職制でしたが、私が住職になった平成10年に定年制に切り替えました。15年には、薬師寺の大講堂が竣工しました。大講堂は、坊主がレクチャーを受ける道場です。薬師寺の伝統的な教学、唯識・俱舎学ですが、東洋の認識論で理解します。チェッコさんの作品を見て、一番理解のしやすい視聴覚に訴えればよくわかると思い、1300年続く薬師寺の大講堂の再建ができた記念に、チェッコさんの作品「生命の劇場」を記念展示いたしました。

チェッコさんは、後にローマ・カトリック教皇庁のコンクラーベ（次期教皇選出会議）の投票箱を制作するほどの人で、イタリアで大変な名誉ある彫刻家です。

私が住職を定年制にしたときは、寺中の者が「松久保秀胤という住職は大変賢明な人だ」と言って褒めてくれましたが、このチェッコさんの作品を大講堂の前に並べると言いだしたら、「なんという愚鈍な住職や。こんなものがなぜ唯識の解釈ができる、大馬鹿者」と言って私を相手にしませんでした。

しかし、そのうちにこの作品を見に来る人がきつと超長蛇の列をなすと、それを見たら大馬鹿者という印象も少しは薄くなるだろう、そう思って、展示会のカタログを1000部作りました。ところが売れたのはたった3部。やっぱり大馬鹿者だなあと行って、みんなが相手にしません。その後、この作品がイタリアのサンタ・クローチェ教会に並びました。余っていたカタログにイタリア語を添えて送ったら、全部売り切れしました。私にはまだその痛手があるものですから、今日のような題にした訳です。

中曽根康弘元首相がこの作品を激賞されて、チェッコさんを高松宮殿下記念世界文化賞に推薦し、



チェッコさんは同賞をもらわれました。そして、この作品を、今日私を紹介してくださった矢澤さんが購入されました。この作品が日本に残るなら、もう私はそれでいい。これからその話に移ります。

作品は向かって左から右へ時間が流れていきます。一番左がAで順にJまでです。

<A>—仏教で、お釈迦様は紀元前2世紀に、人類、生命を12の因縁連鎖である十二縁起を説かれました。その一番目がこの場面の「無明」です。物がなく、明らかでないもの。無明とはカオス、混沌とした状態です。上下2段に別れていて、横に4、縦に4で16枠、それが上下段、合わせて32枠あります。16とは地、水、火、風の4つのエレメントが春夏秋冬の四季に従って混沌としているということです。上下段は陰と陽。陽は現れている状態で、陰は隠れている状態。現在時点でない過去の因縁連鎖によって未来にその因縁連鎖が繋がっていくという意味で、混沌としたカオスを表現された。



チェッコさんは敬虔なカトリックのキリスト教徒です。紀元前1世紀から紀元後1世紀のギリシャ、インドでは、文化・文明の交流があったと考えられるため、この「無明」という東洋の認識論の唯識思想で解釈できることを私は感じました。

<B>—窓が上下段に3つずつ。しかし、上段の3つの真ん中は扉が半分しか開いていません。下段の3つの一番上は扉が開いていますが、何も彫刻はありません。唯識、インドを中心としたベータで考えると、私達の命あるもの、認識力を持っているものをプドッガラ（生命）とサンスクリット語で言います。それはどのような生命を表現してコンテンツとして持っているのか。



胎生で生まれてきたもの、我々です。そして卵生。3番目は湿生、湿気があると命が生まれてくるもの。カビ類です。4番目は化生、いわゆるキノコのようなものです。それらは全部、季節によって生じたり、水、湿気があるか、乾燥であるかによって、生命感が存在するかしないか。それが、この私達の住んでいる宇宙。色界、無色界、欲界という三界にある命はすべてプロドッ

ガラとし、人間だけが命があったというわけではありません。東洋の唯識の考え方では、紀元前2世紀にお釈迦さんがお説きになったプロドッガラ、十二縁起では、私達の生命感は大変広く、平等な生命感を唯識は説いているのです。

<C>-Cの上段には鳥が出ており、下段には人間がいます。これは胎卵湿化という生命の派生する根元を私達の一番身近なものとして表現されています。



<D>-上段の窓が開いているところで人間が逆立ちをしています。下段の窓には通常に頭を上にして立っています。なぜ逆立ちなのか。仏教、もしくはインドのベーダで説いているところでは、私達



は往々にして倒錯、逆さまに物事を考えています。何が逆さまか。無常である。私達人間は、生きているようだけれども、皆お互いに死を背中に背負っている。無常観を倒懸しているのです。私も今年93歳になりました。「長生き元気で結構ですなあ」と挨拶をいただきますが、あんまり嬉しくもない。さっさともうこの世から消えた方が楽だのになあと思うことが再三あります。これまさに倒懸、倒錯の考えでしょう。

無常、不浄、美しいものと汚いものと、往々にして逆さまに考えます。そして苦楽。楽を私達は求めますが、楽の裏には必ず苦があることは、皆さん感じておられると思います。「一切皆苦」と

経典に説いています。まさに倒懸の世界です。でも、鳥には苦楽というものがありません。この場面を見ると、逆さまになっている人間の窓から鳥が飛び出している。我々は苦しい世界にしながら楽を求めています、鳥は自由な青空を平気で飛んでいきます。倒懸がないからです。

<E>-天秤にぶら下がっています。これは逆さまであるか楽であるか正当であるか、そうした倒懸の考え方の天秤の上に私達が暮らしている。危うい綱渡りをしているようなものです。天秤の秤竿の三箇所にも人型像が配され、右端の二人は男女両性が接触している。「名色」(十二縁起の四番目)胎内に生命が宿生した時点の表象です。そのような人生をわかりやすく表現しています。



<F>-4つに仕切られたコマの上に人間が立っています。私達は自分の時代を求め、自分の好きな世界を自分で決めて、ここが私の世界だというように勝手に自分の世界以外は認めない。識別・差別の自在：界別の自在：智慧・身・口・意三業の自在のように自己中心の世界に住む。もう一つは逆さま事です。倒錯も無常・苦楽・浄穢・無我等四顛倒観の上に立っているのです。



上段の丸いものは鳥の世界です。鳥の世界は倒錯もなければ界別もないため、真に自由な拘束のないもの。それは私達の認識の違いによって自由であるのか苦しむのかということ表現しているのでしょう。

<G>-上下段の境の真ん中の四角な板状に凸状になった鋸のその左下の方に鳥がいます。凸状になっているものは、今まで何年間体内で機能している内臓器官。穴が開いたような状態になっているところは、私達の体の唾、爪、頭の毛、小便、大便など新陳代謝物です。四角板状の凸点35個凹点45個は各々内臓器官と新陳代謝物とに区別すると共に凸35点は身体器官を駆使し、凹45点



は識・心を使役没入して修行過程を俱舎論・唯識論・瑜伽師地論等に説かれた修行過程段階を示しています。東洋でフィジカルなものを説いた俱舎論とスピリチュアルなものを説いた

唯識論をこの1枚に表現しているのです。従ってこの下段で、人間が象徴的に両手を上げて私達はこのような状態ですよと示しています。

< H > H—これが一番目の「無明」から始まって、物が動いてきて、

「行」に移りそして識・心が波の中心になって私達の生命感が生まれてくることを示しています。いよいよ生命が具体的に体となって表現されてくることを「名色」と言います。色は物質的なという意味です。私達が胎生でお母さんのおなかの中に宿ったその瞬間を表現しています。



< I >—これは私達がバランスを取っているところ。何をバランス取るのか。顛倒・自在とは対称的な心情・意識を持っています。「天秤発動微細加端」という語句のように、一方に一端動きを発すると戻ることはないと暗示しているように、心の発端が大事である一事を示しています。



< J >—最後は私達がしっかりと修行を積んで、無常観をそのままあるまに認めたならば、この四つ台の上に立っている聖人のように、賢聖人に至趣し、象徴的な4つの段階にあることを示しています。

仏教では、預流向・預流果、一來向・一來果、不還向・不還果、阿羅漢向・阿羅漢果と修行を4つの段階にはっきりと分けています。

一番左は一遍ロジする、一泊してそのまま出て帰ってしまう。

2番目は一晩とは言わずに三晩、四晩を留まって帰る。

3つ目は行ったら、もう帰らない。悟りの世界に入ったらもう戻らないというのが不還向不還果。

一番右の端が羅漢。いわゆる羅漢さんと言われている、半分以上自分の力で悟りを開いた人。

そうして考えていただくと、皆さんもそれぞれの世界で修行をなさって今日の地位にいらっしゃると思いますが、人間として、命のあるものとして、果たして自分が預流向であるか、一來向であるか、素晴らしい世界に一晩だけ泊まっただけでこりごりして退出するか。生きながらにして涅槃に入る、それが一番右の阿羅漢向・阿羅漢果です。

この作品を唯識で解釈すれば「百聞一見にしかず」です。どうぞ皆さん、この作品が公開されたときには、ぜひこれをご覧いただき、自分の人生に置き変えてご覧いただくとありがたいと思います。

